治　国

― 故事に学ぶ指導者の在り方 ―

礼節 Vol. 50

近年、中国による台湾への圧力が強まる中で、旧交の有る東洋哲学で世界的権威者の台湾大学：名誉教授 黄俊傑（こうしゅんけつ）先生に、近況伺いのメールを送りましたら、次の様な返信が届きました。

中国共産党による最近の台湾の弾圧は人々を不安にさせており、孟子（もうし）と斉（さい）の宣王（せんおう）との対話をよく思い浮かべます。（「孟子．梁惠王（りょうけいおう）．3」）。

斉の宣王が問うて言った。

「隣国と交わるにおいて何か良いやり方があるだろうか」。

孟子が答えて言った。

「あります。ただ仁者だけが、自分の国は大国でありながら、近隣の小国に対しても、侮ることなく礼をもって交わることができます。

…また、ただ智者のみが自分の国が小国である場合において、礼をつくしてうまく大国と交わることができます。

…こちらが大国でありながら、小国に対しても礼をもってよく交わることができる者は、天を楽しむ者です。

反対にこちらが小国でありながらも、大国に礼をつくして、よく交わることができる者は天を畏（おそ）れる者です。

天を楽しむ者は、天下を保つことができ、天を畏れる者は、自分の国を保つことができます。」

この対話は 2300 年以上前の孟子の知恵であり、21 世紀における中国本土と台湾の関係の現状は、本土の指導者は「仁のない者」で、台湾の指導者は「智のない者」であるため、双方の関係は悪く、状況は緊張しています。

双方の指導者が儒教の「亜聖」孟子から 21 世紀の新しい知恵を学ぶことができることを祈ります！

黄 俊傑

「なるほど！」と思う内容でした。

その黄先生の返信から１週間程経って、中国共産党 党大会で三期目の続投を決めた習近平のとった自己の独裁体制を確立する為の下劣な行動は、世界中が驚きと失望と軽蔑を伴うひどいものでした。

もしこの人物が、中国の古典や歴史をしっかりと学んでいたとしたら、自分の前任の国家主席の胡錦涛を、満場の共産党代表達の前で騙す様な事が出来るはずはないと思います。

まさに大国のリーダーに相応しくない、礼節をわきまえない蛮行としか言い様がありません。

論語の有名な故事に、『庭訓（ていきん）』の教えが有ります。

孔子が息子の鯉（り）と庭で会った時、「『詩（し）』を学んだかね」と問うた。

「まだです」と鯉が答えると、「『詩』を学ばないと表現力が身につかないよ」と孔子が言われた。

鯉はそれから『詩経（しきょう）』を学んだ。

次にまた孔子が鯉と会った時、「『礼（れい）』を学んだかね』と問うた。

「『礼』を学ばないと社会で生きていく上で、困るよ」と言われ、鯉は『礼記（らいき）』を学んだ。

戸隠神社（長野県）

模範的な父子の教育として有名な教訓で、今から 2,500 年程前の中国にはこの様な優れた教えが有った訳です。

中国共産党の歴史は、たかだか 100 年程でしかなく、数々の王朝が覇権争いを繰り返しながら続いてきた中国の長い歴史の中で、歴代王朝とは何の繋がりも無い、今だけの存在でしかない事をしっかりと認識し、過去に学び、礼節をわきまえた国家運営を行ってゆく事が、結果的に国を治め、世界からも認められる唯一の方法だと思います。

人は皆、必ず老いて死んでゆく・・・

この事は例外なく全ての人が避けられない現実を、今の中国とロシアの指導者は果たしてどう捉えているのでしょうか。

今後、権力という魔物に取りつかれた人物が辿る結末から、世界の人々が学ぶ日はそう遠くない様に思います。

日本も「備えあれば憂い無し」で、有事への備えを急ぐ必要を強く実感する日々です。

徳真会グループ
代表　松村 博史

黄 俊傑（コウ シュンケツ） 先生 略歴

1946 年、台湾高雄生まれ。国立台湾大学歴史学系卒業。Ph.D（ワシントン大学歴史学部）。研究対象は東アジア儒教、戦後台湾史。国立台湾大学歴史学系主任を経て、同大学に人文社会高等研究院を創設、院長に就任、東亜儒学研究中心主任を兼務。2017 年１月、国立台湾大学を退任後、台湾大学特聘講座教授、文徳書院にて講学活動を続ける。その著書は編著を含め 50 冊を超える。

邦訳に『東アジア思想交流史――中国・日本・台湾を中心として』（藤井倫明・水口幹記訳 岩波書店 2013 年）

『徳川日本の論語解釈』（工藤卓司訳 ぺりかん社 2014 年）

『儒家思想と中国歴史思惟』（工藤卓司監訳 池田辰彰・前川正名訳 風響社 2016 年）

最新の著書に『東アジア儒家仁学史論（東亜儒家仁学史論）』（台北:国立台湾大学出版中心、2017 年）がある。